vol.9　2022年2月発行

気象災害による
犠牲者ゼロを目指して

CeMI 気象防災支援・研究センター

News Letter

Contents

1. 春一番について
2. 震　度
　～震度の観測と利用
3. お天気よもやま話
　～早春への天気の変化

1 春一番について

歌の「春一番」はキャンディーズの9枚目のシングル（1976年）です。歌詞の中に「もうすぐ春ですね」というフレイズがあります。懐かしい歌ですが、本当に春を感じてくるような歌ですね。実際の気象現象の「春一番」も春の訪れを示唆しています。

気象庁では「冬から春への移行期（立春から春分までの間）に、初めて吹く暖かい南よりの強い風」を春一番と定義しています。

「春一番」の語源としては、諸説あるようですが、有力なものは、1859年に長崎県壱岐島で、おりからの強風によって出漁中の漁船が遭難して多数の死者を出して以降、地元の漁師がこの強い南風を「春一番」と呼ぶようになったことからきていることです。

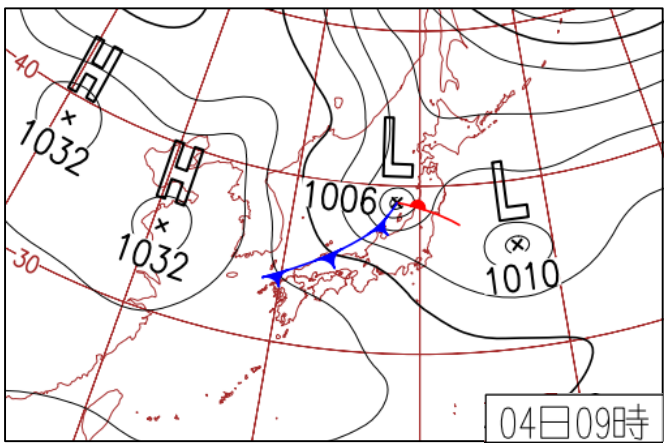
右の天気図は、2021年2月4日に関東地方で春一番となった時の天気図です。日本海にある発達中の低気圧に向かって、暖かい南風が関東で吹きました。東京では、南の風15.2m/sの最大瞬間風速を観測しました。

春一番の基準は各地方により多少異なりますが、おおむね8～10m/sの南寄りの強い風が吹いた時としています。

このように、春一番をもたらすような低気圧は、南からの強風をもたらせます。昔の漁師は、春の訪れに伴って、時として急に強い南風が吹いてくることを知っており、それに対して警戒を込めて「春一番」と言ったのではないでしょうか。歌の「春一番」のように明るいイメージばかりではないのですね。

ところで、日本海を発達しながら進む低気圧は。艱難事故だけでなく、雪の多い地方では暖かい雨が降ることによって融雪・なだれ等の災害も引き起こします。また、竜巻などの激しい現象も伴うこともあります。

予報精度の向上に伴って、これらの現象は精度よく予測できますので、気象情報を活用して災害を避けつつ、歌のように春の訪れを楽しみましょう。



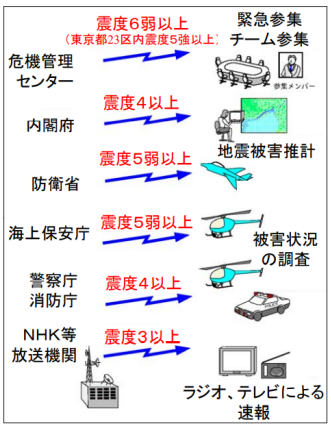
2 震　度 ～震度の観測と利用

地震が発生すると、気象庁から短時間のうちに地震が発生した場所や大きさ及び各地で観測された震度が発表され、私たちはテレビやラジオで速報されることによって地震の発生した場所や大きさ、自分の住んでいる地域の震度を知ることになります。ここでは震度の観測方法と震度の利用について紹介します。

震度は、現在は「計測震度計」とよばれる観測機器によって自動的に観測されています。この計測震度計による観測が始まったのは平成の時代に入ってからで、それ以前は各地の気象台や測候所に勤務する気象庁職員が体で感じた程度や周囲の揺れの状況などから判定していました。気象庁職員が判定する際の判定基準が設けられており、例えば震度１は「地震に注意深い人だけに感じる程度の地震」、震度５は「立っていることはかなり難しい。壁に割れ目が入り、墓石や石灯篭が倒れたり、煙突や石垣が破損する程度の地震」など、基準に照らし合わせて判定していました。

このようにして発表された震度は、国や地方自治体の多くが防災初動対応のための最も有効な情報として活用されていました。また、私たち住民も今発生した地震の震度を知り、自らの対処方法等に利用していました。

阪神・淡路大震災などの発生を契機として、地震災害に対する社会的な関心が高まるにつれて震度に関する関心も高まり、震度の観測方法や発表方法の近代化について検討が進められるようになりました。その結果、客観的な震度判定、多くの場所で観測することが可能、より迅速な発表が可能であること等が必要とされました。そのためには機械による観測が必要とされ、計測震度計の開発が進められ現在に至っています。地震発生から約1分半後には震度３以上が観測された地域の震度、約５分後には各観測点で観測された詳細な震度が発表されています（緊急地震速報は予測される震度を発表）。国や地方自治体では観測された震度によって初動対応が決められており、このうち震度５弱は建物に被害が出始める震度であることから、震度５弱で初動対応が一段アップすることが多いようです。学校でも臨時休校などの判断を行うところが多いようです。



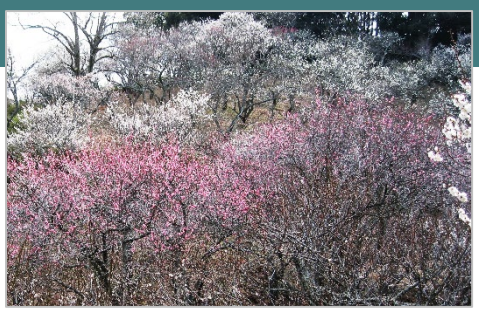
発生する現象や被害に関する解説資料は下記URL

https://www.jma.go.jp/jma/kishou/know/shindo/kaisetsu.html

3 お天気よもやま話 ～早春への天気の変化

暦は2月に入りました。1年のうちで平均的に最も寒いのが1月下旬から2月はじめにかけてです。2月に入ると気温は上昇に転じます。冬至の頃、最も短かった昼間の時間も約1時間ものびて東日本や西日本では早春の気配が感じられるようになります。昼間の時間が長くなって日射しも徐々に暖かさを増し、梅やロウバイ、水仙なども花を開きます。

天気図の上でも、2月ははっきりと変化が見えてきます。例えば、「西高東低」という言葉で知られている冬型の気圧配置、1月はほぼ2日に1日の割合で出現しますが、2月は3日に1日と減っていきます。冬型の気圧配置になっても長く続くことが少なくなってきます。冬型の気圧配置が続かなくなると、今度は日本付近を低気圧が通過しやすくなるのも2月の特徴のひとつです。関東地方など太平洋側の地方では南海上を東進する南岸低気圧によって月別の降雪日数が1月に比べて2月の方が多い所もあります。最深積雪は2月に現れる所も多く、早春への天気の変化の中でも、日本海側や山沿いの地方ではまだまだ雪に対する注意は必要です。



また、日本付近を発達しながら低気圧が通過すると、“春一番”のような強い南寄りの風を吹かせたり、季節外れの暖かい空気をもたらします。こうした大きな天気の変化は時として災害につながることもあり、天気の変化から目が離せません。多雪地帯では雪崩の危険も高くなってきます。新雪による雪崩から何度も厚く降り積もった雪が崩れる底雪崩〔全層雪崩〕の発生が多くなってくる時期でもあります。早春への天気の変化は四季の移ろいのひとつではありますが、気温や風が急激に変化したり、激しい雷、海上での高波などを伴うこともあり、災害への備えも一層必要になってくる時期です。

掲載内容へのご意見、 そのほかサービスに関するご相談・ご要望等ございましたらお気軽にご連絡ください。

NPO法人 環境防災総合政策研究機構（CeMI）
気象防災支援・研究センター
〒160-0011 東京都新宿区若葉1-22ローヤル若葉606号
http://www.npo-cemi.com/center.html
03-3359-7971
03-3359-7987
advisory@npo-cemi.com